

国 語

注 意 事 項

- I 試験開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- II 解答用紙はすべて黒鉛筆(HB)〈シャープペンシルは、HB 0.5 mm以上の芯であれば使用可〉で記入することになっています。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- III 解答用紙右端の出席票に印刷されている受験番号を確認してください。間違いがなければ氏名欄に署名し、切取線から切り離してください。
- IV 試験時間は 75 分です。
- V 問題は 15 ページで大問 2 問です。

マークセンス法について

マークセンス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方式です。

マークに際しては、下記の注意事項を熟読のうえ、間違いのないよう慎重に行ってください。

マーク記入上の注意

- 1. 解答欄にマークするときは、HBの黒鉛筆で次の正しい例のように、濃く正確にぬりつぶしてください。
- 2. マークのしかた

(ア) 正しい例

a 解答が1つの場合、例えばイと解答するときは

1

ア	イ	ウ	エ	オ
---	---	---	---	---

 のように、マークしてください。

b 解答が2つの場合、例えばイとウと解答するときは

1

ア	イ	ウ	エ	オ
ア	イ	ウ	エ	オ

 または 1

ア	イ	ウ	エ	オ
ア	イ	ウ	エ	オ

 のように各1つずつマークしてください。

(イ) 悪い例

1	ア	イ	ウ	エ	オ
2	ア	イ	ウ	エ	オ
3	ア	イ	ウ	エ	オ
4	ア	イ	ウ	エ	オ
5	ア	イ	ウ	エ	オ

○印でかこむ。
全部をぬりつぶしていない。
レ印をつける。
|印をつける。
1欄に2つ以上マークする。

}

このような記入をしてはいけません。

- 3. 一度記入したマークを訂正する場合は、消しゴムで完全に消してから記入しなおしてください。

1

ア	イ	ウ	エ	オ
---	---	---	---	---

 のように×印をしても消したことはありません。

- 4. 解答用紙を折りまげたり、破ったり、また汚したりしないでください。

お詫び

現代文の問題および設問につきまして
は、著作権保護のため、掲載いたしません。
ご了承ください。

二 関白(問題文中では「大臣」)には二人の姫君がいた。姉君(同じく「中宮」)は中宮となったが、関白邸で若宮(同じく「若宮」「宮」)今上一の宮)を出産した後、容態が急変し、後事を妹君(同じく「姫君」)に託して亡くなった。関白は、北の方(同じく「母上」)が妹君の出産後に亡くなったのと同じ悲しみにまたしてもみまわれることになったのである。中宮のなきがらは関白に付き添われて宇治に運ばれ、葬儀がとりおこなわれ、次いで四十九日の法要も営まれた。問題文はそれに続く部分であるが、読んで後の問いに答えよ。

はかなく過ぐる月日にて、御四十九日も果てぬれば、若宮の御恋しきは悲しみにも紛れざりけるにや、大臣出でたまふ。このたびばかりこそ都の方見めと思せば、立ち出でたまふにも、なほ現し心あるにやと、われながらつらくて、道すがら流るる御涙をのごひあへたまはず。御年四十歳に二つこそ余りたまへば、盛りにきよらにほひたまへりし人の、それともなう影のやうになりたまへるしもぞ、あてにかはらかに懐かしげなる御さまを、めづらしと見奉りたまふにも、姫君は日ごろの恋しさに、せきあへず悲しと思したり。

若宮を見奉りたまふに、さらに御目も霧りふたがりて、さだかにも見奉りたまはず。しひて(涙を)のごひ隠して見奉りたまふに、さらにただ人とおぼえさせたまはず。今から気高くやむごとなき御光さへ添ひて、御眼居など賢う心恥づかしげに、おそろしきまでおはしますに、行く末頼もしく、中宮の御ため、なき御後までもいみじき御光なりとうれしく思されて、今はこの世を思し捨つるには、姫君のいたう面やせたまへる御顔やうの、いよいよつくしうねびまさりたまへる心地して、にほひらうたげなるさまに、寄る方なう世を心細しと思したるに、待ちつけてうれしげに思ひたまへるを振り捨てん、またいと悲しけれど、この世ながらの別れ、ことの数ならず、いとせめて恋しからむときは、迎へても見きこえてんと、一筋に思しなすつれば、よろづ心やすくて。

関白をば左の大臣に譲りきこえて、出家したまふべきよし申させたまふを、帝、「さらにあるべきことならず。中宮の御事を思ひきこえたまはんにつけても、若宮の人とならせたまはむさまを、心やすく見おきたまひてこそ思し立たぬ。また昔の御形見とも誰をか見るべき。なかなかかへりて心浅く恨めしき御心なり。亡き御影にも、宮の御事をこそうしろめたしと思しおきけめ」など、たびたびかへさひのたまはずれど、(関白はまわりの人びとに)「さらにはこればかりは百度の宣旨かたくと、とどまるべきならず。

限りある道をば、國王も惜しみとどめさせたまふことなし。この世の悲しびこれに過ぎたることあるまじ。家の榮えは極めてき。かばかり天の下祈り願はれさせたまへる今上一の宮わが家に生まれおはしまして、思ひのごとく君の行幸ありき。家の風口惜しく、末の世の名の惜しかるべきならず。大臣の位にて多くの年、世のまつりごとを過つことなかりき。ときの後の御親として、出で入りの御かしづきにつけて、面立たしく見奉りても過ぎにき。若宮つひに世をたもち治めおはしますこと疑ひあるべき御さまならず。伝はらむ名はともかくても今は同じことなり。その上には世のはかなさをあながちに思ひ知りし身の、今までつれなくながらへて、つひにかかる悲しびにまどひぬ。しひて同じさまにて身を惜しまんこと、いとうとましかるべし。誰も誰も公おほやけわたくし私 われをあはれと思さん人びとは、この姫君を代はりとは見たまひて、心細くて過ぐしたまはんとぶらひたまへ」とお頼みになる。妹君には「かかるあぢきなき世と見れば、世づかはしくとかく見おききこえんと思はず。ただこの古里に過ぐしたまひて、若宮の御代を待ちつけたまへ。(帝も)中宮の御事を思し召さんあはれのなごりにて、一人止まりたまへらんを思し召し捨つることあらじ。様異に心細かりける身の契りと思して、いくほどあるまじき世を過ぐしたまへ。世を去りぬる身の、さすがにまがよはむため、聞き苦しく、過ぎたまひし母上、中宮のなき御影に瑕となるばかりのことだにし出でたまはずは、おぼろけにてさばかりのことあるまじけれど、女の身は心より外に乱りがはしきこともあるものなり。ゆめゆめ用意したまへ」など、泣く泣く聞こえたまひて、限りありて渡るべき物どもこそ、左の大臣には奉りたまへ、さらぬそこらの宝物、伝はりたる所どころの御蔵、領じたまふ御莊など、母上の御方さまのものも、そこらありしは、さながら姫君に奉りたまふ。

(「風につれなき」による)

- 注
- * 1 現し心||正気で理性のある心。
 - * 2 かはらかに||さつぱりとして。
 - * 3 御眼居||「眼居は目つき」の意。
 - * 4 ねびま
 - さりたまへる||「ねびまざる」は、成長するにつれて美しく整うの意。
 - * 5 左の大臣||左大臣。閔白の弟。
 - * 6 かへさひのたまは
 - すれど||反対の意向をおしやるけれど。
 - * 7 家の風口惜しく、末の世の名の惜しかるべきならず||家の威厳が失われたり、後世に名
 - 声こゑが傷つくことを惜しまなければならぬということない。
 - * 8 出で入りの御かしづき||参内や退出時のお世話。
 - * 9 つれな
 - く||無情にも。
 - * 10 同じさまにて||先に妻を失った時と同様に。
 - * 11 世づかはしく||世間一般のように。
 - * 12 身の契り||
 - 宿命。
 - * 13 世を去りぬる身||出家した我が身。
 - * 14 まがよはむため||「まがよふ」は、ここでは世を背いたままの状態であるの
 - 意。
 - * 15 おぼろけにて||普通の状態では。
 - * 16 渡るべき物ども||伝えるべき物。
 - * 17 そこらの||多くの。

問1 中宮の四十九日の法要をすませた関白ほどのような思いをいだいて出発したのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 関白は、このような悲しみのなかでも、若宮に会いたいという気持ちがつよくなり、自分がまだ正気でいられることをつらく思いながらも、都に向けて出発した。

b 関白は、長いあいだ都を離れていたために都の様子が気になって仕方がなくなり、四十九日の法要がおわるのを待つて、都に向けて出発した。

c 関白は、同じことなら妻とむすめの二人の最期を見送った地で出家したいものだと思って、なつかしい宇治に向けて京を出発した。

d 関白は、宇治にしばらくひきこもり、沈みがちであったので、何とか気を紛らわせることができないものかと思って、あてもなく都に向けて出発した。

e 関白は、都の自邸を留守にしていたあいだにたまっているはずの所用を少しでも早くすませたいものだと思って、都に向けて出発した。

問2 妹君には関白の姿はどのように映ったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 父に久しぶりに会った妹君には、以前の面影もなく、悲しみにうちひしがれ、精彩を欠いた今の父の姿は、かえって上品でさっぱりと、やさしげに映った。

b 父に同行した妹君には、以前、宇治にいたころの悲しみのために精彩を欠いた父はどこにもなく、うってかわって、上品でさっぱりと、やさしげな様子に映った。

c 毎日父に接している妹君には、以前の面影もなく悲しみのために精彩を欠いた父が、若宮と対面する今日はうってかわって穏やかな表情になり、上品でさっぱりと、やさしげな様子に映った。

d 父の世話をしている妹君には、以前の面影もなく悲しみのために精彩を欠いていた父が、今ではすっかり回復し、これまでになく上品でさっぱりと、やさしげな様子に映った。

e これまであまりの悲しみのために父のことを気にかけることもなかった妹君には、今日の父の姿は、関白という地位にふさわしく、思いのほか威厳に満ちた様子に映った。

問3 関白は若宮を見てどのように思ったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 若宮は、高貴でりりしいだけでなく、今までどこにも見たことのないような威厳のあるお姿であるため、薄幸な中宮とは異なって幸運をもってお生まれになったのかもしれないと思った。

b 若宮は、中宮にあまりにもよく似て高貴な輝かしさもそなわっていらつしやるために、かえって多難な将来が心配されるのではなからうかと思った。

c 若宮は、輝くように高貴な顔立ちのなかにも、繊細さをそなえていらつしやるところが中宮にそっくりであり、中宮をしのぶすがとしては何よりだと思った。

d 若宮は、愛らしいなかにも、中宮に似て高貴な輝きがそなわっており、わが家にこれまでなかった新たな個性の出現が期待できるかもしれないと思った。

e 若宮は、並はずれて高貴で、いかにも聡明な目元は見る人が気後れするようであり、他の人を圧倒するような様子は、中宮の亡き後の我が家の誉れであると思った。

問4 関白は妹君を見てどのように思ったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 関白は、このまま自分が出家しても、すぐに若宮や妹君が困窮するというようなこともないだろうと思うと、少しは気が楽になったように思った。

b 関白は、このまま自分が出家しても、出家は今生の別れとはちがうのだから、恋しくてならない時には、妹君を迎えとることもできると思うと、少しは気が楽になったように思った。

c 関白は、自分自身の出家はともかくとして、長い間懸案であった妹君の出家にもある程度めどがたつたかと思うと、少しは気が楽になったように思った。

d 関白は、このまま自分が出家しても、これまで二度も経験したような悲しい目にあうことはもはやないだろうと思うと、少しは気が楽になったように思った。

e 関白は、このまま自分が出家しても、時間さえたてば悲しみはいえ、いずれは忘れることができるにちがいないと思うと、少しは気が楽になったように思った。

問5 関白は、なぜ出家を決意したのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 関白は、自分自身の人生は本意なものであったとしか言えないが、幸いにも自由に身を処すことができるようになったので、ここでひとまず人生の区切りをつけたいと思ったから。

b 関白は、これまで中宮の死去のために実現されないうままになっていた妻との約束を実行する時がいよいよやってきたと思ったから。

c 関白は、自らは栄華をきわめ、若宮の即位は確実であるうえ、妻だけではなくむすめまでも失った自分が、もはや俗世に生きることは未練がましいと思ったから。

d 関白は、自分自身は臣下として栄華をきわめ、さらに帝の外戚となることも確実であって、そのような状況では、自ら出家した方が政治的には安泰であると思ったから。

e 関白は、自分が帰るのを待っていてくれた妹君の様子を見て、これならば自分が出家しても妹君が十分ひとりやっていくことができると思ったから。

問6 関白は、妹君の将来についてどのように言ったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 関白は、このようにはかない世だと知った以上は、妹君がせめて世間並みになるまで、生きていて見守ってやりたいと言った。

b 関白は、このようにはかない世だと知った以上は、妹君の将来をどんなに心配したからといって、どうなるというものではないと言った。

c 関白は、このようにはかない世だと知った以上は、妹君には、できることなら、自分の生きる道を自分自身で探し求めてほしいと言った。

d 関白は、このようにはかない世だと知った以上は、一刻も早く妹君を託せる人を見つけ出して、安心させてやりたいと言った。

e 関白は、このようにはかない世だと知った以上は、世間並みに妹君がどのようになるかを最後まで見届けたいとは思わないと言った。

問7 関白は妹君にどのように言ったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 関白は、妹君に、このまま宇治にひきこもり、私といっしょに出家したうえで、この世の執着をすっかり捨ててしまいなさいと言った。

b 関白は、妹君に、運命は自らの手ではどうすることもできないものなのだから、自ら幸せになろうという気持ちを捨ててしまいなさいと言った。

c 関白は、妹君に、このまま本意なことがあっても、静かに暮らし、いずれ若宮が帝位につかれる時を待っていなさいと言った。

d 関白は、妹君に、わたしといっしょに暮らしながら、これまでどおり、亡き母と中宮のことを思つて供養に専念しなさいと言つた。

e 関白は、妹君に、自分は何の財産も残してあげられないけれども、それを何とか乗り切つて、いずれ幸運がまいこむ時を待ちなさいと言つた。

問8 関白は、妹君に何を期待しているようにと言つたのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 関白は、妹君に、妻と中宮の供養を無事すませることができたら、またここに帰ってくることもあるだろうから、その日があるのを期待しているようにと言つた。

b 関白は、妹君に、たとえどんな困難な時が来るとしても、その時には仏の御加護があるはずだから、常にそれを期待しているようにと言つた。

c 関白は、妹君に、帝も中宮に対する思いが残つていらつしやるので、妹君にもきつと配慮なさつてくださるだろうから、それを期待しているようにと言つた。

d 関白は、妹君に、このまま世間並みの暮らしをし、気持ちを楽天的にもつて生きておれば、中宮のように運も開けるのだから、その時を期待しているようにと言つた。

e 関白は、妹君に、苦境に耐えて、このまま静かに暮らしていたら、いずれだれか思いを寄せる人も出てくるだろうから、それを期待しているようにと言つた。

問9 波線部④を現代語訳せよ。

(以上)

